

巣箱 を用いた

エゾモモンガの 生態調査



滑空するリス

顔の半分を占める大きな瞳が愛らしいエゾモモンガ (*Pteromys volans*) はユーラシア大陸に分布するタイリクモモンガの北海道亜種として位置づけられており、滑空するリスとして知られています。

最近ではタイリクモモンガのほか近縁のアメリカモモンガ (*Glaucomys volans*) がペットとして出回っており、モモンガは比較的メジャーな動物といえるでしょう。しかし、モモンガの野外における生態調査はほとんど行われていませんでした。その理由として、

- 完全な夜行性動物で日没前に巣から出ることはほとんどない。
- 小型（頭胴体長約20cm）である。
- ほとんど鳴き声を出さない。（雄は繁殖期に「ズー」と虫のような連続音を出す）
- 滑空という特殊な移動能力をもっているため追跡が困難。

以上のことが考えられます。

そこで私が学生時代にエゾモモンガの調査を行った際には、これらの点を考慮し鳥の巣箱を用いた方法を取りました。

巣箱を用いた調査法

一般にエゾモモンガは天然の樹洞やキツツキの古巣などに営巣しますが、小鳥用の巣箱も利用することがあります。

調査地は北海道・帯広の、アカエゾマツ、カラマツ、チョウセンゴヨウなどが定期的に植栽された針葉樹の人工林で、一部にシラカンバ、カシワなどの広葉樹も見られました。

この林に25m間隔で8行10列の80個の巣箱を地上3~4mの高さに架設しました。

調査期間は積雪のない5~10月、巣箱の見回りは週1回、エゾモモンガの寝ている昼間に行いました。

個体確認（性齢^{*1}、外部計測値^{*2}）、巣材の搬入などの利用状況を記録し、耳標^{*3}によるマーキングを施して巣箱に戻し、その後の巣箱利用を追跡しました。

- *1 齢は体重80g以下で吻が細長く体毛色がやや黒っぽい個体を幼体と判断した
- *2 頭胴長、尾長、後足長、耳長、体重
- *3 ウサギ用のイヤータグ

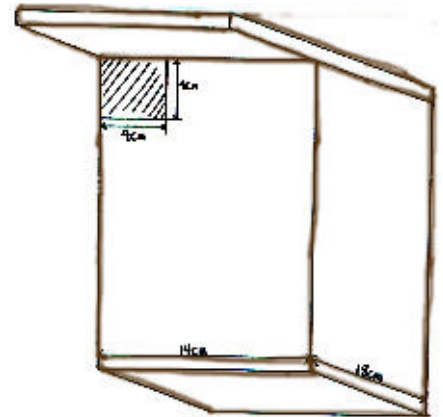


図1 巣箱の外観

シジュウカラ用と呼ばれるタイプ。入口の大きさをエゾモモンガの好みに合わせて4×4cmとした。ふたは開閉式。

個体数（匹）

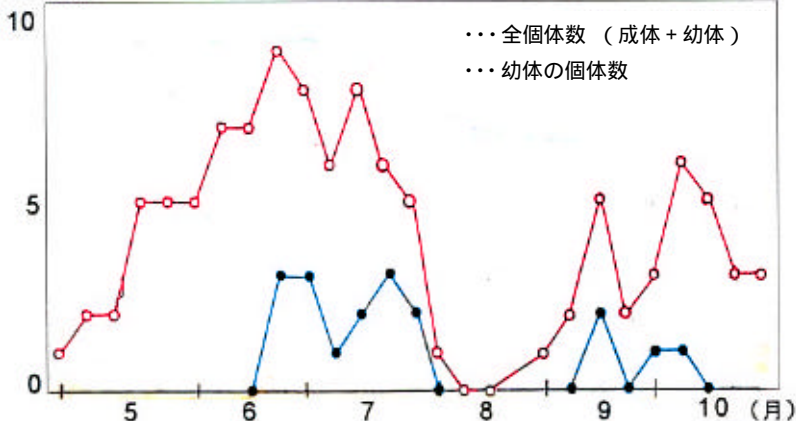


図1 エゾモモンガの個体数の季節変化

利用個体数の変化は繁殖に関係する。エゾモモンガは年2回繁殖を行うので、1回目の繁殖で生まれた幼体が母親から独立する7月と、2回目独立する9月が巣箱利用のピークに達する。

8月には幼体の分散および気温の上昇、寄生虫の発生などの理由で巣箱を避けるため、利用個体数は減少する。なお、冬季（12月~3月）は巣箱の保温性が樹洞より劣るため利用が減少するという報告もある。

雑居ファミリー



結果は図1のようになりました。興味深かったのは、複数個体での巣箱利用が確認されたことでした。

エゾモモンガは、冬季には保温のため1つの巣に数個体で同居することが確認されていますが、この調査で冬以外でも複数個体の利用があることが確認されました。最も多く見られたのは成体雌・雄での同居で、成体雌同士での同居はほとんど見られませんでした。このことからモモンガもムササビ同様に成体雌同士は互いに避け合っていると考えられます。

また授乳中の子を持つ雌の巣箱に別の雄が同居していた例も確認されました。このような例は哺乳類では極めて

珍しく、エゾモモンガがほとんど攻撃性を持たない寛容な動物であることを示すものと考えられます。

この調査は巣箱という人工的な環境を設定し、限られた範囲で行ったものであるため、この結果をそのままエゾモモンガの生態と考えるには多少無理があります。しかし、これまで全く知られていなかったエゾモモンガの生態の解明に多少なりとも寄与できたと思っています。

巣箱を用いた調査は、材料費が安価で専門的な技術も必要とせず、エゾモモンガの利用頻度も高いことから、有効な調査手段といえるでしょう。今後、仕事の機会があれば、全く調査の行わ

れていないニホンモモンガ(*Pteromys momonga*)についても調べてみたいと考えています。

エゾモモンガは意外と身近にいなながらその存在をあまり知られていません。樹上生活者であるため地上に降りることをほとんどせず、森林の伐採によって確実に消滅する種です。私は調査に携わる者として、このような動物の存在にスポットライトを当て、その大切さをアピールしていきたいと考えています。この可愛い動物が何も言わずに姿を消すことがないように...

(大阪支社調査室・井上剛)

魚類調査物語

その2、便利な道具にゃウラがある

